

知床五湖における利用規制導入の検討過程と利用者の意識

森林緑地管理学講座 花卉・緑地計画学分野

大場一樹

(背景と目的) 多くの自然地域では過剰利用による影響が問題視されており、その問題の解決には利用規制が検討される場合がある。しかし利用規制の導入には、利用圧と自然資源および、利用体験への影響との因果関係が明らかであることに加え、その方法に対して利害関係者間の合意を得る必要がある。知床国立公園の知床五湖では、ヒグマとの安全対策、植生の保護および、利用体験の質の低下の解決を目的に、自然公園法による利用規制が導入された。本研究では、自然地域における適正な利用および、利用規制導入のあり方を明らかにするため、知床五湖利用調整地区を事例に、検討過程の整理、利用者への意識調査、関係者への聞き取り調査から、利用規制導入までの合意形成のあり方、導入された利用規制の評価および、今後の課題を考察することを目的とした。

(結果と考察) 検討過程の整理から、利用規制導入のプロセスは大きく 3 期に分類できると考えられた。第 1 期では、知床五湖における適正な利用の方向性が検討された。第 2 期では、エコツーリズムの機運の高まりと相まってガイドツアーによる運用体制の筋道がつけられた。第 3 期では、運用体制が具体化され利用調整地区制度が導入された。利用規制の構想から具体化へと段階的に密な議論を重ねてきたことが、関係者の合意にもとづく利用規制導入に寄与したものと考えられる。

利用者への意識調査から、利用規制導入前よりも、導入後の回答者の制度への賛意が高かった。制度の導入によって、利用規制の必要性や理解が進んだと考えられる。また、未規制よりも、ガイドツアーへの参加やレクチャーを受講した回答者の方が制度への賛意が高かった。登録引率者または公園スタッフからの直接的な情報提供が、回答者の制度への理解を促したと考えられる。

関係者の聞き取り調査から、いずれの立場の関係者も「ヒグマとの安全対策」という共通認識を持っており、導入された規制には一定の評価をしていることが明らかになった。知床ではあらゆる立場の関係者の間に共通した明確な課題が存在したことが、合意形成に寄与したと考えられる。

(総合考察) 知床五湖の利用規制は、いずれの立場の利用者からもおおむね高い評価が得られた。さらに、制度の設計段階で利用者の声を反映させる必要性、自然資源や利用者の意識に関する今後のモニタリングの重要性が示唆された。